



Bedside to Bench, Bench to Bedside

沖山奈緒子

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学教授

つい1週間ほど前に現在のポジションを得たところで、この原稿を書いています。この立場につけばなおさらのこと、学生や若い医師に「ぜひPhysician-Scientistを目指してください」「Bedside to Bench, Bench to Bedside」とお話しすし、それは心からの勧めです。臨床をされていて感じた疑問点を、研究という形で解決する・1つの原理を見出すというのは、医師にしかできない研究の楽しみ方です。逆に、研究で得た成果が治療法や診断法の一助となることを目指すのは、目の前の1人の患者さんを救えたという手が実感する経験とはまた違った、高揚感のある夢です。

さて、私の人生の中でもっとも業績をあげたこの5年あまりは、私の遅い出産・育児とも丸被りの期間でした。出産・育児という、とくに女性にとって大きなイベントは、人生の幸せではありつつも、仕事面ではマイナスなだけなのではないでしょうか。なかなか寝付かない子どもの隣で悶々と添い寝をしながら、自問する、もしくは諦めてしまう瞬間もあるかもしれません。

私にとって1つ象徴的な仕事に、妊娠という、体内で「非自己」が育っていく経験から、あるタイプの皮膚筋炎は妊娠を契機に発症するのではないかと思いついて結果も出したものがあります。さらに子育てを介して、マルチタスク処理能力やじっと待てる忍耐力は、われながら確実に向上し、若手を指導

しながらの研究活動に役立ちました。

また、子どもの好奇心は「役に立つ」から生まれるわけではありません。単に「なんか面白いから」であり、本当はこれが研究の原点です。私自身、Physician-Scientistを目指すというような明確な気持ちから最初からあったわけでもなく、単に、実験してみて、思ったような、もしくは思いがけない結果が出て、それが楽しかった、というのが、研究活動を始めた大学院生時代の本心であったことを思い出しました。

私は、これらの出産・育児を介して得た知見を“Baby-Bedside to Bench”と勝手に呼んでいます。患者さんのBedsideのみならず、人生のどの局面からでもPhysician-Scientistへの道は拓けると、お伝えしたいと思います。